

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

縦横無尽

タテとヨコ色とかたちのフィールドワーク(9) :  
異形の織物5 : 楕円状の織物

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-03-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 吉本, 忍 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10502/5223">http://hdl.handle.net/10502/5223</a>

# 縦横無尽 タテとヨコの 色とかたち のフィールドワーク 9

吉本忍

## 異形の織物5

# 楕円状の織物

織物の織りあがりのかたちは、すべてが四角形であると理解していたわたしが、インド

ネシアのティモール島でおこなった1970年の最初のフィールドワークで輪状織物と出会い、その後には管状、丸紐状、杖状、鬘状、楕円状といった異形の織物の存在を知ったことは、先月号までに述べてきたとおりである。そうした異形の織物のうちで、その存在をは

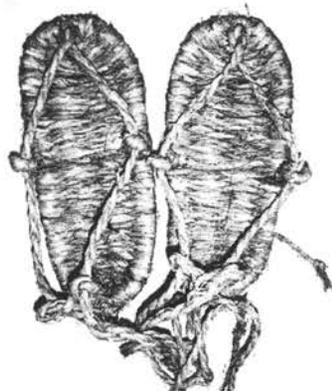


写真1 八丈島のワラジ

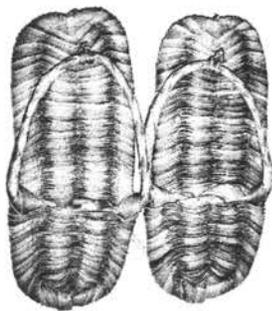


写真2 アダンを素材とした久米島の草履

## 道具を使わず織る織物

じめて知ったのが楕円状の織物であった。

それは1987年に発表した論文、「手織機の構造・機能論的分析と分類」を執筆していたときのこと、織物の基本概念を「織物とは、糸、あるいは糸に類する線状物を経糸と緯糸とし、あらかじめ直線的に配置され、張力を備えている経糸に対して、緯糸を直線的に交叉させることによって組織された製品である」と定義し、手織機を以上のように定義した織物を織るために使われている「道具」として位置づけたことをきっかけとしている。というのには、モノづくりをおこなうさいに、より良い道具があれば便利ではあるが、道具がなくともモノづくりはできることに思い至ったことから、道具を使わなくても織物は織



写真3 道具を使用しないワラジづくり (八丈島、榎立：1987年)



写真4 ワラジ台を使用したワラジづくり (八丈島、榎立：1987年)

## ワラジは楕円状織物

ワラジのかたちは周知のとおり楕円状を呈している。また、そうしたワラジをつくる作業は、日本語では、しばしば「ワラジを編む」とも表現されてきた。しかし、ワラ縄をタテ糸として両足の指と片方の手で保持し、もう一方の手でワラをヨコ糸として交叉させてつくれるワラジは、楕円状という異形のかた

れると考えたわけである。たとえば地面に穴を掘るさいに、柔らかな土壌であれば道具がなくても素手で穴を掘ることができる。しかし、世界の諸民族のもとに、道具を使わないで織物を織るという事例があるのかということについては、ずいぶんと頭を悩ました。内外のさまざまな文献にあたってみたものの、このことを明示している文献にはついにめぐりあうことはなかった。そうしたあいだには、たとえば1本のタテ糸の両端を2人で引っ張るといふ方法で、100人が50本のタテ糸を引っ張った状態で整列し、そのあいだを別の人間がヨコ糸の先を持って、張り渡された50本のタテ糸の端から移動しながら、タテ糸の上、タテ糸の下、タテ糸の上、タテ糸の下と順番にヨコ糸を通していけば、道具をまったく使わないで織物を織ることができるとはいえないかと考えたりもした。このような方法は、理論的には可能ではあるが、もとより、そのようにして織物を織ってきたという事例については知られていない。そして、このような試行錯誤を繰り返したあげくにたどりついたのが、今も日本の各地で見ることのできるワラジ(草鞋)づくりであった。灯台下暗しとは、まさにこのことで、世界中にさがしもとめた事例が身近なところにあつたのである。



写真5  
道具を使用しないナシ族のワラジづくり  
(中国、雲南省：1999年)



写真6  
中国・湖南省でヤオ族のワラジづくり  
に使われてきたワラジ弓(草鞋弓)  
(国立民族学博物館蔵：標本番号  
H93870-2)

## 草履と投石紐

織りあがりか楕円状のかたちを呈した織物は、中央部ではタテ糸の間隔が広がるようにヨコ糸をゆるやかに組織し、先端部や手元部ではヨコ糸を強く引き締めながら組織することによってかたちづくられる。そうした織物としては、ワラジをはじめとする草履のほ

ちを呈しているものの、あきらかに前記の織物の基本概念に合致している。したがって、前掲の論文の執筆以来、わたしはワラジを編物ではなく、織物として位置づけている。道具を使わないで織られる織物としてたどりついたワラジによって、楕円状という異形の織物の存在もまたはじめて知ることとなったわけである。

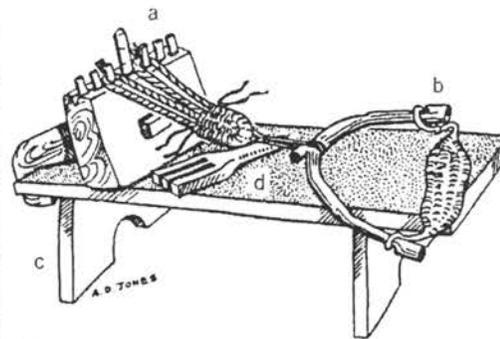


図1  
ワラジ台と腰当を併用した中国のワラジ用腰機  
[INNES 1959:59, Fig.60]

写真7 ナツメヤシを繊維素材としたバルーチュ人の道具を使用しない草履づくり(イラン、バンドル・アップバス近郊：1999年)

かに投石紐があり、とくに投石紐の分布は世界の広範な地域にひろがっている。草履については、これまで日本のほかでは、朝鮮半島、中国、イランで、その存在を確認している。日本をはじめとする極東地域の草履はワラを素材としたワラジが普遍的につくられてきたが、沖縄の南西諸島ではアダン素材とした草履もつくられている。また、アイヌ人のもとではブドウヅルを使った草履がつくられてきた。これらの草履はいずれも平織組織の織物で、草履づくりにさいしては、

わが国では、さきに述べた道具を使わないで織るという方法以外に、足型のワラジ台を使用して織る例が一般的である。ただし、アイヌのブドウヅルを素材とした草履は道具を使用しないで織られていたとみられる。また、中国の草履としてはワラジが一般的であり、それらのワラジづくりには道具を使わないでつくる方法以外に、ワラジ台に腰当をともなつた腰機 (back tension loom) や、弓状に反つたT字形のワラジ弓(草鞋弓)などの道具を使用したワラジづくりが知られている。さらに、イランでは、南東部の紅海沿岸地域に住むバルーチュ人もとで、ナツメヤシの葉を素材とした草履が道具を使わないで織られてきた。それは、これまでのところ極東地域以外で楕円状の織物を草履として使用している唯一の例といえるが、20世紀後半以降には、ゴム草履の普及によってほとんどつくられていない。

投石紐はわが国ではまったく知られていないものであるが、武器や穀物の収穫時期にスズメなどの害鳥を追い払うための道具として



写真8 ペルーの投石紐

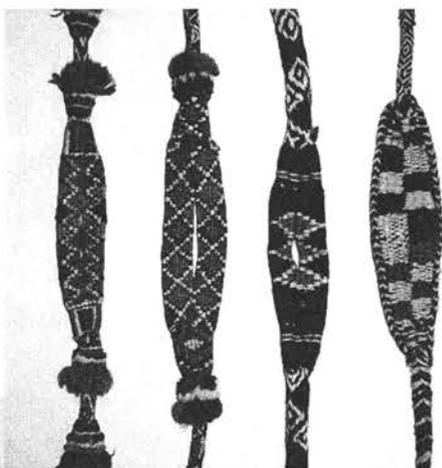


写真9 ペルーの投石紐(部分)

写真10  
プレ・インカの土器にあらわされた投石紐を持った人物像  
(天野博物館蔵)



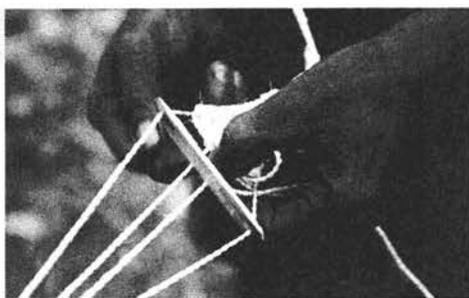


写真16 投石紐づくりのタテ糸に組み込まれたベツイミサラカ人の幅出し板（マダガスカル、アンタニメナケリィ：1993年）

て、世界の広範な地域で使用されてきた。これは楕円状の織物、あるいは楕円状の編物や皮革の両端に1メートルを超える長さの紐が付属している。一般にこれらの投石紐の片方の紐の端には、指を通すための輪がつくられている。その使用方法は、中央部の楕円状の部分に石や土の塊をはさみ、2本の紐の両端を握って勢いよく振り回しながら、標的を狙って2本の紐のうちの1本を手元から放すことによって投げ飛ばすとい

うもので、命中すれば人間や小動物を死に至らしめるほどの威力がある。こうした投石紐のうち、楕円状の部分に織物を使用しているばあいの製作方法は、草履づくりとほぼ同様で、足の指と腰でタテ糸を保持し、道具をまったく使わないで織る方法のほかに、両足に渡した1本の棒と腰、あるいは1本の杭や柱などのタテ糸保持棒（先端棒）と腰でタテ糸を保持する腰機型式の道具を使って織る方法、2本の杭（タテ糸保持棒）にタテ糸をかけ渡した地機（ground loom）型式の道具を使用して織る方法などがある。なお、腰機型



写真12 ケチュア人による道具を使用しない投石紐づくり（ペルー、チンチェロ：1999年）



写真11 ケチュア人によるタテ糸保持棒を使った投石紐づくり（ペルー、チンチェロ：1999年）



写真15 柱と幅出し板を使用したベツイミサラカ人による投石紐づくり（マダガスカル、アンタニメナケリィ：1993年）

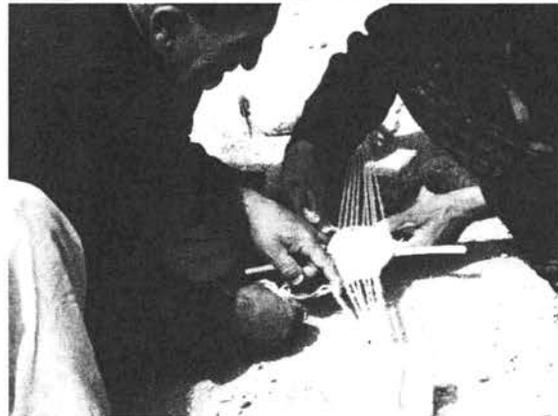


写真13 2本の杭と幅出し棒を使用したアゼルバイジャン人の投石紐づくり（イラン、ゲルデ：1999年）



写真14 シリア人による1本のタテ糸保持棒と幅出し棒を使った投石紐づくり（シリア、アレppo：2003年）

式や地機型式の道具を使用した、イラン、シリア、マダガスカルの投石紐づくりには、楕円状の織物を織るための補助具として、タテ糸のあいだに幅出し棒や幅出し板などのタテ糸整列具をともなったものが見いだされる。また、投石紐の織物部分の組織は、草履と同様に平織組織であるが、ペルーの投石紐は、プレ・インカの時代から今日に至るまで、その多くがさまざまな色糸をヨコ糸に使用した綴織技法によって織られてきた。とりわけ儀礼で使用されてきた投石紐はカラフルな幾何学模様や房飾りできわめて装飾性の高いものとなっている。

\*\*\*\*\*  
 これまで6回にわたって連載してきた異形の織物シリーズは、今月号で終了する。このシリーズでは、管状、丸紐状、杖状、鬘状、楕円状といった特異な形状の織物を紹介してきたが、世界のどこかでは、さらなる異形の織物がひそやかに織られているのではないかとと思われる。次号からは機織りに欠くことのできないタテ糸の張力と関係する織機の基本構造についてあらたなシリーズを開始する予定である。

よしもと・しのぶ

文献

- HOMMEL, R.P.  
1999年 (1999) China at Work, Cambridge, Massachusetts, London: The M.I.T. Press.
- JONES, R.A.  
1995年 Non-European Looms in The Collection at Bankfield Museum Halifax, Halifax: Halifax Museums.
- 吉本 忍  
1987年 「手織機の構造・機能論的分析と分類」『国立民族学博物館研究報告』12巻2号。